

①脂肪性肝疾患 ②ウイルス肝炎 ③機能性消化管障害

④炎症性腸疾患 ⑤消化管がんを疑う患者 ⑥大腸がん検診 ⑦膵がん

これら疾患が疑われた場合はぜひご紹介下さい。

① 脂肪性肝疾患（SLD/MAFLD）に関して

現代、全人口の約 30%がメタボリックシンドロームを有しており、約 20%が、いわゆる脂肪肝を伴っています。2024 年 8 月 日本消化器病学会・日本肝臓学会は、従来の NASH を含む疾患概念を、以下の様に医学用語の整理が行われました。

Steatotic Liver Disease (SLD) : 脂肪性肝疾患

Metabolic Dysfunction Associated Steatotic Liver Disease (MASLD) : 代謝機能障害関連脂肪性肝疾患

Metabolic Dysfunction Associated Steatohepatitis (MASH) : 代謝機能障害関連脂肪肝炎

Alcohol Associated (Related) Liver Disease (ALD) : アルコール関連肝疾患

MetALD : 代謝機能障害アルコール関連肝疾患

Cryptogenic Steatotic Liver Disease : 成因不明脂肪性肝疾患

Specific Aetiology Steatotic Liver Disease : 特定成因脂肪性肝疾患

従来から、脂肪肝は、アルコール性の脂肪肝と、お酒をあまり飲んでいない（1 日摂酒量 ; 男性約 30g 未満 ; 女性約 20g 未満）にもかかわらず生じる非アルコール性脂肪肝 nonalcoholic fatty liver disease (NAFLD) に区分されてきましたが、MASLD が、従来の NAFLD に該当します。お酒をあまり飲まない

MAFLD の人の中でも約 10%、全人口の約 2%が病理学的に代謝機能関連脂肪肝炎（MASH）と診断さ

れる進行性の肝疾患を有しています。アルコール性脂肪肝は、肝硬変から肝がんが生じえることがよく知られていますが、近年増加している MASH 患者も、肝癌のハイリスク群であり、定期的な肝臓に対する検査が必要です。ひと昔前であれば「AST, ALT やγ-GTP の軽度上昇であれば、肝臓に対する精査は必要ない」といった考えが主流でした。しかし、近年では MAFLD 患者は専門機関での精査を組み合わせることが推奨されております。

今年度、当科では Canon 社の Aplio α verifia という新型腹部超音波装置を導入しました。病変を詳細に観察できるだけではなく、肝臓の線維化を評価するエラストグラフィ、超音波減衰を用いた ATI 法による肝臓脂肪量測定機能により、非侵襲的かつ簡便に 肝線維化の程度（慢性肝炎の進行度）を評価し、高い罹患率を有する 脂肪肝の患者さんの中から肝硬変や肝がんに至る可能性のある MASH 患者を囲い込むことが期待できます。進行する可能性がある患者さんを選別し、画像検査を、当院で担当し、日常の先生の診療のお手伝いをさせていただければと考えます。

② ウイルス肝炎

近年では、高い確率で制御が可能となったものの、抗ウイルス療法は複雑化し、ガイドラインに沿った治療が、難解な場合もあります。当院にご相談頂けましたら、肝臓専門医が中心となって対応し、治療後は当院と先生のもとで、経過観察を継続させていただきます。

③ 機能性消化管障害

近年、様々な身体症状を主訴とする患者が増加しており、特に腹部に関連した症状は最も多いことがし

られております。難治性の下痢・便秘といった便通異常を訴え過敏性腸症候群が疑われる患者や、慢性的に胃のもたれや心窩部痛などの心窩部を中心とする腹部症状が長く続く機能性ディスぺプシア(FD)の診断と治療では、十分な診察や問診に引き続き、各種画像検査や内視鏡検査を行い、がん、良性の潰瘍性病変や炎症性腸疾患といった器質的疾患、全身性や代謝性疾患がないかを検査で確認します。異常がない場合には、近年発売されているいくつかの異なる作用機序の新薬をそれぞれ患者の病態やニーズに応じ
て組み合わせた治療を、積極的に行っております。

④ 炎症性腸疾患

5ASA 製剤、ステロイドしか治療薬の無かった時代は過去のものとなり、ここ数年で、新規の治療薬が上梓され、治療のストラテジーが複雑化しています。当院では、厚生労働省班会議にも参画している医師を中心に、専門的に診療を行っています。また、開発治験も実施しております。

⑤ 消化管がんの早期発見および治療技術の向上

2021 年度に、消化器内視鏡システム（オリンパス社の「EVIS X1」シリーズ）および高画質の 4K モニターを更新しました。ハイビジョンを上回る画質（HQ 画質）で消化管をより詳細に観察できるようになりました。このシステム導入により①病変の発見率の向上②病変の広がり、進行度や悪性度といった病変の性質を治療前の段階で正確に診断し低侵襲治療が可能③内視鏡治療をより短時間に施行することが可能 といった利点を実感しております。また癌のハイリスク症例や咽頭違和感などの有症状の方に対しては、上部消化管内視鏡検査時に咽頭・喉頭の詳細観察も行っており、耳鼻科とも連携し頭頸部癌に対

する精査および治療をおこなっております

⑥ 大腸がん検診

大腸がんの罹患率は世界的に増加傾向であり、2019 年の部位別がん死亡数は肺がんに次いで第 2 位です（男性第 3 位：女性第 1 位）。がん検診が大腸がん死亡率を減少させることが認められ、対策型の集団検診としては便潜血検査が広く行われておりますが、大腸がん検査の第一選択は全大腸内視鏡検査です。全大腸内視鏡検査の受診率が高くない理由の一つとして、前処置の問題があげられると考えます。比較的短時間に大量の腸管洗浄剤（下剤）を内服して洗浄する必要があります。当院においては、患者さんの併存疾患（抗血栓療法の有無も含めて）、ADL やニーズに合わせて、入院や日帰り（前処置は在宅もしくは病院外来処置室）いずれにおいても検査できる体制を整えております。また、複数の前処置製剤を準備し、患者状態に合わせた前処置を心がけています。

⑦ 膵がんの早期発見

近年増加している膵がんを比較的良好な予後が期待できる段階で診断するためには、直接腫瘤自体を視認されなくとも、膵管の口径不同、狭窄や拡張、および分枝膵管の局所的な拡張や小嚢胞形成を間接所見としてとらえることが肝要であります。これら初期変化像を描出しうる画像診断として、比較的簡便で侵襲が非常に少ない腹部超音波検査が非常に有用であります。近年、このような所見を契機に、CT や MRI/MRCP だけではなく、これらの画像では描出できないような微小病変に対しても超音波内視鏡の有用性が認知されるようになりました。当科においても、2021 年度に新規導入されたオリンパス社の「EU-

ME2 PREMIERPLUS」 という高精細な画像システムを用いた精査を積極的に行っております。この新型システムは、組織の硬さを画像化する機能や造影剤を用いて血流パターンを認識するといった多彩な機能をも搭載しています。膵がんをはじめとした胆膵領域を中心に幅広い疾患の早期発見と確定診断が今まで以上に可能となり、最適な治療法に結び付けることができるようになっております。

今後の当科における消化器疾患に対する取り組み

当科では、患者数が増加してきているが、診療に難渋する消化器疾患や全人的な医療の一端としての消化器疾患診療を幅広く行っております。臨床の最前線で診療されている地域の先生方のお手伝いをしながら、より多くの患者に質の高い診療を提供できることを強く願っております。

上記疾患だけではなく、消化器疾患の診療に困った際には、是非ともご連絡いただければ幸いです。

連絡先 金沢医療センター 地域連携室 消化器内科

Figure 1 症例 1

